

知識人

知識人

1

太平洋戦争という破滅に向かった、日本人の愚かさを書き立てる知識人は多い。彼ら全員に共通しているのは、敵の顔が見えていないことである。彼らは、アメリカについて決して書くことしない。よく見れば、アメリカも日本と同じか、それ以上に愚かな振る舞いをしているのだが、それは彼らの目には入らないのである。

日本人の病について書くこととする知識人自身が、その同じ病にかかっているようにも思える。だが、戦時中の日本人の愚かさとは、結局のところ、アメリカ人の愚かさの反映に過ぎない。

たしかに、多くの日本人には敵の顔が見えていなかった。彼らの敵が何であったのか、分かっていたわけではなかった。その点では、現代の知識人も同じである。しかし、全ての日本人がそうであったわけではない。中には、敵の顔を直視した人々もいたのである。

敵とは無知であり、愚かさである。それは西洋文明そのものであり、キリスト教であり、民主主義であった。

2

リベラリストの問題点は、人間の平等を無批判に受け入れていることである。彼らは結局、すべての人間は自分と同じだ、と言っているにすぎない。それは単なる無知である。

たとえば、一人の中国人が、日本人にやられたとしよう。そうすると他の中国人は、ライバルがいなくなつて得をした、と考える。一方で、一人のアメリカ人が日本人にやられたならば、他のアメリカ人は、日本人を皆殺しにしよう、と考える。

人間というものは、住んでいる土地や文化が違えば、全く違う生き物になる。リベラルの人々はそうした違いを無視し、日本人と中国人は同じ生き物だ、と考える。しかし、日本と中国は全く別の世界である。その違いを認識しなければならない。

中国を民主化しよう、などというのは愚かな考えである。昔の日本人は、中国を近代化しよう、と考えて、最後には戦争になった。つまり、リベラルな人々こそが、あの戦争を起こしたのである。我々は、その失敗から学ばねばならない。

民族が違って、人間の遺伝子には違いがない。しかし、精神は遺伝子によって決まるわけではない。人間の身体は親から受け継がれるものだが、人間の精神は教育によって作られるものである。ゆえに、学問と文化こそが人間の本質である。

欧米から日本に來た外交官やサラリーマンは、何もかもが母国とは正反對だ、と感じるらしい。仮に、地球外生命体が見つかったとして、彼らと我々との違いは、日本人とアメリカ人の違いほど大きくはないだろう。実際のところ、我々は互いに異なる宇宙に暮らしているのである。

だから、アメリカで上手くいった政策を、日本でそのまま実行しても、上手くゆくはずがない。社会そのものが正反對なのだから、アメリカとは真逆のことをして、ようやく上手くゆくわけである。

世界のすべての地域で上手く行くような、普遍的な政治の方法が存在するわけではない。しかし、それぞれの地域において、最適な政治のあり方は存在するはずである。

たとえば、数学において、すべての方程式に共通する、たった一つの解が存在するかといえば、それは存在しない。しかし、それぞれの方程式に、それぞれ異なる解が存在する、という仮定は合理的である。

つまり、すべての場合に成り立つ普遍的な解が見つからなくても、それぞれの場合において、それぞれ別の答えを見つけることができれば、それで十分なのである。だから、世界中にひとつの政治を押し付けるのではなく、それぞれの地域に合った政治のあり方を、探してゆけばよい。それが本当のグローバリズムであろう。

満洲とロシア

1

もしも中国共産党が、新疆地区のウイグル族は共産党の支配を喜んで受け入れている、と言ったとしても、多くの日本人はそれを信じないだろう。しかし同じ中国政府が、満洲事変は侵略戦争だった、と言えば、日本人は無条件でそれを信じる。これは不思議なことである。当時の満洲で暮らしていた人々が、満洲国をどう評価したかということ、現在の中国政府が、満洲国をどう評価するかということは、全く別の問題である。それを混同するべきではない。

満洲国で暮らしていた人々は、奉天軍閥が戻ってくることを、本當に望んでいたのだろうか。満洲事変の前と後で、住民の生活はどのように変化したのか。満洲の治安状態は改善したのか、悪化したのか。満洲事変はたしかに、満洲に住む人々の福祉を向上させた。その事実を無視してはならない。

2

満洲国を破壊したのは、日本から來た官僚たちである。彼らは、満洲国が建国された歴史的な経緯も、その理念も全く理解していなかった。それが、第一義的には満洲に住む人々のものである、ということを理解しなかったし、するつもりもなかった。

彼らにとってそこは、新しい国家の実験場、自由に形を作れる砂場のようなものだった。彼らは満洲を私物化し、経済的な実験を繰り返して、それを奇妙な怪物へと変えてしまった。

岸信介のような経済官僚は、満洲国にとっては悪夢でしかなかった。かの地で人体実験を行ったのは、軍医たちだけではない。満洲という国家の身体を切り刻んだのは、彼ら経済官僚である。

3

ロシア人は日本人を恐れている。

太平洋戦争末期、日本政府はソ連政府に対して、アメリカとの講和の仲介を依頼した。ソ連はこれを断ったが、そのこと自体が不可解である。

ソ連とアメリカとの関係からいえば、ここで日本の申し出を受け入れて、日本に恩を売るという選択肢もあったはずである。日本の国土には戦略的な価値があるので、日本を味方に付けておくことは、彼らにとって十分に利益があった。また、その際の交渉によって、平和裏に満洲を割譲させることもできたかもしれない。

しかし、ソ連はそうしなかった。彼らは日本政府の提案を受け入れず、あべこべに日本への侵攻を開始した。

当時の日本は、アメリカ軍による爆撃によって、全国の主要都市に壊滅的な打撃を受け、また、原爆の投下によって、広島・長崎は灰燼に帰していた。そのような状況で、なぜソ連は、わざわざ日本に侵攻する必要があるのか。日本にもう戦う力がないことは、明らかだったのではないか。

だが、ロシア人からすれば、そうとも言えなかった。日本人が、原爆程度で死ぬはずがない。東京が消滅したぐらいで、日本人が戦いをやめるはずがない。そう確信していたからこそ、彼らは手を緩めなかった。ロシア人は、日本人を人間だと思っていない。鬼か悪魔のようになっている。

もともと彼らは被害妄想が強く、誰もがロシアを狙っている、と思いがちである。そのため、周辺国に対して強硬な姿勢をとることが多いが、とくに日本に対しては、異常と言えるほどの警戒心を抱いている。それはなぜかといえば、やはり日露戦争とシベリア出兵が原因だろう。

ロシアの権力はアジア型である。ヨーロッパの権力は、市民契約説とか、王権神授説とか、イデオロギー的なものによって支えられている。しかしロシアの権力は、中国の権力に近い形をしている。つまり、皇帝の徳によって、権力が維持されているわけである。

そのため、皇帝は常に、自分に徳があることを示し続けなければならない。その第一の条件は、人民を守る力があることを示すことである。中国の場合は夷狄からの朝貢がそれであり、ロシアの場合は、対外戦争に勝利することが皇帝の義務であった。その義務を履行できない場合、皇帝の権威は失墜し、帝国は崩壊せざるをえない。

その引き金を引いたのが、日露戦争であった。この時のトラウマがあるので、彼らは日本を過剰に警戒しているのだろう。その後のシベリア出兵が、そのイメージをさらに強固なものにしてしまった。

4

だいたい、日本人は戦争が強すぎるのである。

先の大戦の原因として、国際社会における日本の孤立を挙げる人が多い。彼らはさらに、日本の外交下手がその状況を招いたのだ、と分析する。だが、果たしてそうだろうか。

私の意見では、どれだけ外交が下手であっても、あんな風に孤立することはありえない。当時の日本は、ほとんど世界のすべてを敵に回

していた。三国同盟はたしかにあったが、ドイツが日本の味方だったと言えるかどうか、疑わしい限りである。

そもそもナチスの教義によれば、日本人は劣等民族である。優秀な民族であるドイツ人が、本当に日本人を対等な同盟者とみなしていたのだろうか。

また、日中戦争の初期において、日本軍と対峙した中国兵を指導していたのは、ドイツ人の将校である。ナチスは蒋介石のもとに軍事顧問を派遣し、戦争指導を行わせていた。つまり、事実上、日本とドイツは敵同士だったのである。それから数年で、両者が信頼関係を築けたとは思えない。

以上の理由から、日本とドイツの同盟関係は表面的なものにすぎず、嫌われもの同士が手を結ばざるをえなくなった、という程度のものだったと考えられる。

では、どうして日本がそこまで嫌われていたのか、といえば、たぶん強すぎたからだろう。日本軍の強さは装備の強さではない。どちらかといえば、装備では常に負けている。にもかかわらず、何度も勝ってきたわけである。日本軍の強さは心の強さである。味方がどれだけ劣勢でも、命を惜しまず奮起するので、稀にあるチャンスを確実につかむことができる。その結果、何度も劣勢を押しつけて勝利を手に入ってきた。そのために、実力以上に強く見えたわけである。

ゆえに、おそらくどんな外交を展開しても、日本の孤立は避けられなかったと思われる。なぜならば、誰もが日本を警戒していたからである。目立ちすぎるのも良くないということだろう。

5

戦争は数ではない。戦争において重要なものは時間である。兵力においてどれだけ勝っていても、それを前線に投入できなければ意味がない。

たとえば、真珠湾攻撃における日本側の戦果は、時間を稼いだことである。ハワイに結集していた米海軍機動部隊を壊滅させることによつて、米軍が前線に投入できる兵力を大幅に減らすことができた。もちろん、アメリカの生産力をもってすれば、十や二十の艦隊を作り出すことは造作もなかっただろう。しかし、それには必ず有限の時間がかかるのである。

そのようにして獲得した時間的な猶予を、日本軍が有効に活用したかどうかという点には、様々な評価がありうるだろう。だが、一度動き始めた軍隊は、放つておいても占領地域を拡大してゆくものである。そしてそれはある程度、日本側の戦略目標と合致していた。

大本営がそれを正しく認識していたかどうかは分らないが、太平洋戦争は、日本にとっては防衛戦争であった。というのも、日本側にアメリカ侵攻の手段がない以上、それは守りの戦争になるしかないのである。そして、守りに徹する場合に重要なことは、これもやはり時間を稼ぐことである。

なぜならば、戦争が長引けば長引くほど、攻める側には不利となるからである。戦争を続けるということは、それだけで体力を使うことである。ゆえに、戦争が長引くほど相手は疲れ、諦めて帰ってしまうかもしれない。また、敵国内部に、戦争を続けられなくなるような事情が生じる可能性もある。それは内乱でもよいし、天変地異でもよいし、後継者問題でもよい。何らかの問題が生じれば、戦争をやめざるをえなくなるだろう。そして、そのような問題が生じる可能性は、戦

争が長引くほど高くなるわけである。

よって、守る側にできることは、できるだけ時間を引き延ばして、相手の意志が挫けるのを待つことである。日本軍は、そのためにできるだけのことをしたと言える。

6

また、日本人の性質が戦争に向いていることは、言うまでもないだろう。日本人は組織的な行動が得意であり、また、忍耐強い。その特性がそのまま、日本軍の強みとなっていたわけである。

例を挙げて説明しよう。一九二七年、広東を出発して北伐の途上にあった国民革命軍は、まず上海を攻略し、続いて南京を占領した。その際に、国民軍の一部が、日本を含む各国領事館を襲撃するという事件が起きた。いわゆる南京事件である。この中国兵の暴行に対して、イギリス軍やアメリカ軍は艦砲射撃で応戦したが、日本軍は一切攻撃を行わなかった。

その理由は、日本側の陸戦部隊の戦力が不足していたためだ、とされている。もしも、日本の攻撃に対して中国側が逆上し、日本人居留民を虐殺するなどの蛮行に及んだ場合、日本側にはそれを防ぐだけの戦力がない。そのため、国民軍を刺激しないようにしたわけである。このときの日本人の行動は、非常に合理的であり、冷静であった。問題は、それが合理的すぎたということである。領事館員が暴行を受けているとき、海軍陸戦隊の隊員は、間近でそれを目撃していた。目の前でそれを見ていたにもかかわらず、手を出すという命令を受けていたため、何もしなかったのである。

日本人は、個人の感情よりも、組織の論理を優先させる。それは彼らの忍耐力がなせる業であり、称賛されてしかるべき性質ではある

が、日本人以外には理解不能である。現に、この事件をきっかけとして、中国人は日本人を見下すようになり、英米は日中両政府の接近を疑うようになった。

日本人の行動は非の打ち所がないほど合理的であったが、それゆえに、全く人間的には見えなかったのである。この合理性は、戦場においては勇敢さにつながり、また、仕事の場においては勤勉さにつながるものである。それはたしかに強みなのだが、他の人々からは誤解されやすいものでもある。

これに関して、別に誰かが悪いというわけではない。ただ、そういう誤解が過去にはあったし、今もあるだろうし、民族の性質というものは容易に変わることはないだろう、と思うだけである。

このように話してくると、いったい日本人の楽しみはどこにあるのだろう、と不思議に思う人もいるかもしれない。個人的には、それは静寂の中にあると思う。やるべきことが何一つなくなった静寂こそが、人間の幸福というものだろう。

7

ついでに、真珠湾事件はアメリカ政府の陰謀だった、という意見について考えてみたい。結論から言えば、それは事実だと思う。事件の前後におけるルーズベルトの言動から判断する限りでは、彼は事前にそれを予想していた、と考えざるをえない。遅くとも、前日にはそれを把握していたはずである。

一方で、事件の報告を聞いたルーズベルトが、腰を抜かすほど驚いていた、という証言も残っている。これは一見不可解である。もし

も、奇襲のあることを事前に予想していたのだとすれば、どうして彼はそのニュースに驚いたのだろうか。

おそらく、彼は奇襲のあることを知ってはいたが、その被害の大きさについては予想していなかったのだろう。実際に現地からの報告を聞いて、その被害の甚大なことに驚いたわけである。

結局のところ、アメリカ人ほど間抜けな民族はいない。自分の陰謀で自滅しているわけだから、放っておいても害はないだろう。

近代国家から世界政府へ

1

近代国家という政治体制が確立されたのは、フランス市民革命と、それに続くナポレオンの時代だったと考えられる。つまり、フランスがヨーロッパで初めて近代国家となったわけであるが、その政治形態はフランスに留まらず、周辺国家へも波及してゆくことになる。

なぜ、近代国家という政治機構は、瞬く間にヨーロッパ中に広がり、その後、世界中に広まったのだろうか。

その理由は、軍隊の強さにあると考えられる。ナポレオンは強かった。それは、彼の才能のみによるものではなく、軍隊の性質が、それ以前とは全く異なっていたという理由もある。

国民国家は、国民によって構成された国家である。それは、自国民と他国民とを区別する排他性を特徴とする。まず、国家の領域を明確に区切り、その内側を自国、外側を他国と定義する。その上で、国家の領域を守るためには、国民は命がけで戦わねばならない、という考えを国民に刷り込む。

人間は、自分の愛するもののためであれば、命がけで戦う。その性質を利用して、国家という巨大なものを、一つの愛の対象として定義しなおすわけである。実際には、国家が戦争に負けたからといって、一兵士の家族が死ぬとは限らない。だから、兵士が国家のために命を捨てねばならない理由は、本当はない。しかし、近代国家は巧妙にその問題をすり替え、兵士が国家のために死ぬように仕向ける。そうしなければ、戦争に勝てないからである。

それまでのヨーロッパの戦争は、傭兵を中心に行われていた。傭兵は金のために戦うので、命を捨ててまで戦おうとはしない。それに対してナポレオンの軍隊は、一兵卒に至るまでが命がけで戦った。その戦闘力が、周辺諸国を圧倒したのである。ゆえに、周辺国家が生き残るためには、彼ら自身も近代国家という政治体制を採用するしかなかった。そのようにして、ヨーロッパ中で近代国家が成立していったのである。

つまり、近代国家は、本質的に戦争のためにある。戦争に勝つために、国民国家が必要とされてきたのである。そして、国民国家、あるいは市民社会というものを支える理念として、民主主義も同時に必要とされてきた。したがって、民主主義は戦争のために存在する、ということができる。

2

また、このような国民国家体制は、ヨーロッパとは独立に、同時期の日本においても成立していたと考えられる。

おそらく江戸幕府は、国民国家の集合体である。「お国のために」と言う場合の国は、もともとは藩を意味していた。つまり、江戸時代の藩は、一つ一つが国民国家のようなものだったと言える。日本では、

ヨーロッパとは無関係に、しかしここでもまた戦争のために、国民国家が成立したわけである。

国家が、国民に命がけで戦うことを要請することは、必ずしも不道徳なことではない。なぜならば、国家が生き延びることが、国民が生き延びることにつながるからである。だが、戦争がいなくなった世界では、もはや近代国家は必要ない。現代において、それはすでに時代遅れである。

逆に考えれば、近代国家は不要であると認識されつつあるということは、戦争の必要性が薄らいでいる、ということの意味している。我々の社会は、確実に平和へと向かっている。

しかしながら、国民国家的な枠組みは相変わらず機能し続けるだろう。それはなぜかといえば、共通の言語を話す人間集団が、政治的なまとまりを作ることには自然だからである。言語の違いは人間にとって非常に大きな障害であり、これ乗り越えることは容易ではない。したがって、政治的な集団は、言語の違いをもととして構成されるはずである。それはおそらく、国民国家の境界とほぼ一致するだろう。

ゆえに、現存する国民国家は、一つの政治的な単位としてこれからも存在し続けるだろう。しかしその境界は、以前ほど厳密に決める必要はなくなる。なぜならば、国民国家が厳密な境界を必要としたのは、基本的には戦争のためだったからである。戦争のない世界においては、そのような厳密性は不要であり、無駄である。

そのように境界を放棄することによって、それら諸国家よりも、さらに上位の政治的な単位が存在する余地が生まれるだろう。我々は、この最上位の政治単位を基準にして、これからの政治を考えてゆくようになる。これが、世界政府への私なりの見取り図である。

我々はまず、戦争のなくなった世界がどのようなものであるか、と

いうことを考えねばならない。そして、それが分かった後で、その世界を実現するためには何をすればよいか、ということを考えればよい。つまり、まず結果について考察し、然る後、その結果を生み出す原因について考察する、ということである。原因が分かれば、後はそれを実行するだけでよい。

これは、阿弥陀如来が因位の菩薩であったときに、五劫思惟の中で実践したことと同じである。彼はまず、自分が実現すべき極楽浄土を心に描き、それを実現するための手段について思いをめぐらした。その手段を突き止めるまでに、五劫の時間を要したわけである。

3

国語というものは、人工的に作られるものである。それは、近代国家を構成するための、不可欠の条件だと言ってもよい。だが、近代国家がなくなったとしても、国語が必要なくなるわけではない。それは、政治のための言語として役立てられるだろう。

日本語の場合、一度目は万葉集から古今和歌集の時代に、二度目は明治維新の頃に作られたと考えられる。

一度目は、中国語からの差別化として理解される。初期の大和朝廷において、貴族たちが日本語を話していたという保証はない。おそらく朝鮮語や中国語の方言が、共通語として話されていたのではないだろうか。その後、日本の独立とともに、国語としての日本語の可能性が模索され、様々な文体の変遷のうちに、平安時代前期に日本語は一定の完成をみた。

二度目は、日本語の英語化である。まず、英語の文献を翻訳するために、日本語の文章構造が、英語に合わせる形で変化した。その後、

学校教育を通して、日本全土に標準語が普及していったわけである。三度目があるとすれば、戦後の新仮名遣いだろう。

敬語について

日本語で敬語を使う場合、文法に強い制約がかかる。

たとえば、「天皇陛下の仕事はこれこれである」という文を考えてみよう。この文は、このままでは敬語にすることはできない。これを敬語にするためには、「天皇陛下はこれこれの仕事をする」と、あるいは、「おやりになる」というように、文の形式を変えなければならない。

尊敬語を使う場合には、敬語を使う相手を、動作の主体にして文を作らなければならない。いまの例では、「仕事」を主語にすると敬語を使えないのに対して、「天皇陛下」を主語にすると敬語を使えるわけである。

ゆえに、尊敬語を使うことによって、文章表現そのものが、相手の意思を尊重するようなニュアンスを含むようになる。それによって、相手に主体性があることが自然に強調されるのである。そういう理由があるので、日本語にとって、敬語は非常に重要な要素である。

そして、本来の日本語では、天皇には常に敬語を使わなければならない。ということとは、天皇は、日本語において、あらゆる動作の主体として現れてくるわけである。したがって、日本語という言語には、構造上すでに天皇の存在が埋め込まれていると言える。おそらくは、日本語が存在する限り、天皇制は存在し続けるだろう。それが良いか悪いかは別にして、そういうものである。

そう考えると、GHQの行った日本語への統制は、天皇制を形骸化させるための、最良の試みだったと言えるだろう。敬語の衰退は天皇制の衰退を招く、と言えるかもしれない。

天皇陛下は世界平和を望まれている。ゆえに、それを実現することは日本国民の義務である。

動機がない犯罪

1

すべての犯罪には必ず動機がある。動機がない犯罪もありうる、と主張する人間は、彼自身の犯罪を隠そうとしているだけである。犯罪という大げさだが、良心の呵責をごまかすために、そういうことを言うのである。

彼が言いたいのは、誰もが犯罪を犯しうる、ということであり、さらに言えば、誰もがすでに犯罪を犯しているようなものだ、ということである。つまり、彼は原罪の存在を主張しているのである。

そして、そのような主張は、自分自身の心のやましさを隠すために行われる。皆が犯罪者であれば、自分の犯罪も咎められずに済む、という考えである。それが、キリスト教徒の思考パターンであり、リベラルな人々の思考パターンである。

実際には、動機のない犯罪はありえない。そして、動機が明らかにされなければ、適切な裁きを下すことはできない。ゆえに、動機の追及を諦めてはならない。

2

また、自由意志の存在や、人権の尊重といったドグマも、このような傾向を助長している。人間の行動の動機は、必ずしも、その本人の中に見つけられるわけではない。つまり、本人が自分の行動の理由に気付いていない、ということもありうるわけである。

しかし、自由意志の存在を認めるならば、すべての行動の原因は、その人自身の中にあることになる。そうすると、本人にも動機の分か

らない犯罪は、何の動機もない犯罪として理解されてしまうことになる。だが、そのような犯罪であっても、何の動機もないとはいえないのである。

行為主体の存在を仮定することは、人間行動の正しい理解を阻害しているように思われる。

3

原罪の存在を証明することはできない。ゆえに、原罪が存在する、という前提で議論を進めることは危険である。もちろん、それが存在しない、ということも証明することもできない。しかし、存在することが証明できない場合は、さしあたって、存在しないという前提でものを考えたほうが安全である。自由意志もこれと同じである。

自由主義と疎外

1

資本主義は、必ず外部を必要とする。したがって、それは奴隷制と相性が良い。なぜならば、奴隷は常に市民社会の外に存在するからである。しかし、資本主義は階級社会の原因ではない。原因はリベラリズムである。

自由主義の本質は、自由意志の肯定である。それは、人間の自由な意思を尊重し、それを否定し制限しようとする要素を、社会から排除しようとする思想である。それゆえに、自由主義は本質的に人間疎外的である。

なぜならば、人間が自由な意思を持ちうるということは、外的な要因に影響されずに、各自が判断をなすいうことを意味しており、そのような考え方自体が、個々の人間に対する周囲からの影響を無視しているからである。

しかし実際には、人間は自由に判断を下すことはできない。我々は常に周囲からの影響を受けており、その影響のもとで自らの行動を決めている。ゆえに、自由主義は事実と相違する思想である。そして、その思想を信じることによって、その人は、周囲の世界に対する興味を失い、正しく関心を持つことができなくなってしまう。

そのような仕方では、その人は世界から疎外され、また、世界を疎外するようになる。彼の注意は、自分がふだん会い、直接会話をする人間だけに向けられ、それ以外のすべてに対して無関心になってしまう。それこそが、階級社会の本質である。階級社会とは、そのような無関心の結果であり、人間疎外の結果である。自分と直接関係を持たない人間が、どのような境遇にあらうとも、何の関心も持たない。そういう態度が階級社会を生み、それを固定化するのである。

そして、そのような態度の原因が自由主義である。マルクスは、階級闘争を生み出す原因として、資本主義を批判した。だが、階級社会の本当の原因は、資本主義ではなく、自由主義の中にこそある。リベラリズムは間違った思想であり、その間違った思想を信じることによって、様々な社会問題が生み出されている。

2

では、ある思想が間違っているとはどういうことだろうか。間違った思想と正しい思想は、どのように区別されるのだろうか。

その疑問に答えよう。間違った思想とは、事実と相違する思想である。正しい思想とは、事実と一致する思想である。リベラリズムは事実と相違するので、間違っていると言える。それだけのことである。しかし、精神の自由こそが人間の価値であり、自由な思想を持ちうるということは、何よりも尊重されるべきことではないのか。

もちろん、西洋人は歴史上そのように考えてきた。その考えを様々な形で発展させてきたことが、西洋における哲学や思想の歴史であった。したがって、西洋の哲学や思想は、すべて無価値である。なぜならば、西洋における思想の歴史そのものが、誤った前提の上に成り立っているからである。

事実からかけ離れた自由な思想には、何の価値もない。そのような無意味な思考の集成が西洋の思想史であるのだから、それはゴミの山にすぎない。西洋文明には何の価値もない。それは人類共有の負債である。

3

また、ある人は言う。近代科学は、西洋における合理主義を背景として成立したものである。したがって、近代科学を理解するためには、必ず先に西洋思想を理解しなければならない、と。

そうではない。近代科学の成果は、経験によって確かめられるものである。ゆえに、それが成立した思想背景とは無関係に、その正しさは理解されうる。

そもそも、西洋における哲学や思想は、それ自体が正しいものであるかどうか、つまり、事実と一致するかどうかということを問題にしない。一方で、科学はそれを問題にする。したがって、近代科学というものが一つの思想とみなされうるのであるならば、それは、伝統的

な西洋思想すべてと何らの血縁関係をも持たないだろう。近代科学は本質的に新しいものであり、非ヨーロッパ的な思想である。

我々は、西洋において生み出された文化のうち、正しいものを受け入れ、間違ったものを捨てるべきである。よいものを受け入れ、悪いものは捨てるべきである。一つのを捨てたら、他のすべてを一緒に捨てねばならない、という理屈はない。また、一つを受け入れたら、他のすべてを受け入れねばならない、ということもない。

よいものを選び、悪いものを捨てることを選択せんちやくという。これも阿弥陀如来によって理解するべきである。

日本の戦略

1

日本政府はアメリカの言いなりになっている、とよく言われる。実際その通りである。それはなぜかといえば、グアムに米軍の基地があるからである。アメリカ政府は、その気になればいつでも日本を空爆できる。ゆえに、日本はアメリカに従わざるをえない。

サイパンの陥落は、ある意味で日本の降伏以上に重要な出来事であった。この事件が、その後の日本の歴史を決定付けたといってもよい。サイパンをみすみす敵の手に渡した東条英機の罪は、日本史上のどんな罪人よりも重い。日本がサイパンを取り戻すまで、東条は靖国に合祀されるべきではなかった。

おそらく米軍は、グアムを要塞化し、徹底的に守りを固めているだろう。核攻撃によっても破壊されえないような堅固な地下要塞を作

り、大量の武器弾薬や食料を備蓄しているはずである。したがって、力攻めでグアムを落とすことは不可能である。

しかし幸いグアムに関しては、日本と中国の利害は一致している。ゆえに我々は、アジア諸国の連携のもとで、政治的な力を駆使して、グアムを平和裏に明け渡させねばならない。それができれば、日本に未来はない。

沖縄の基地は、グアムと連携して機能するようになっていと思う。バックアップとしてグアムが存在しなければ、沖縄基地が単独で機能することはできないだろう。つまり、グアムを解放することができれば、アメリカは沖縄から撤退せざるをえない、ということである。沖縄の基地問題は枝葉末節にすぎない。本当の問題はグアムである。

日本人の立場から言えば、マリアナ諸島は存在しないほうがよかった。あそこに島があるということが、日本の戦略を非常に複雑なものにしている。たとえ米軍がグアムから撤退したとしても、彼らが作った要塞はそのまま残されるだろう。それが別の勢力の手に渡ってしまわないように、我々は永遠にグアムを管理し続けなければならない。

しかし、今は目先のことに集中するべきだろう。我々の基本的な戦略は、グアムを放棄したほうが得だ、とアメリカ人に思い込ませることである。トランプは金の勘定しかできないので、グアムから撤退すれば軍事費が浮き、また、東シナ海を通るアメリカ船舶の安全は自衛隊が保証するから、撤退したほうがよい、などと言えば、あっさりグアムを手放すかもしれない。

注意しておくべきことは、アメリカ人は、ここで述べたようなことに気づいていないだろう、ということである。彼らは、日本は自発的にアメリカに従っているのだ、と思い込んでいる可能性がある。実

際、アメリカ人の間抜けさは我々の想像をはるかに超えている。その場合、上手くやればグアムをだまし取れるかもしれない。

グアムは、日本という猛獣にはめられた首輪である。世界中を敵に回してなお戦える国は、日本以外には無い。我々は、我々を押さえつけている、この首輪を外さなければならない。もしなければ、自由に動けないのである。

2

石原莞爾は、戦争の発展段階を次のように考えていた。

まず、一次元の戦争がある。これは、戦闘に参加する部隊が横一列に並び、敵を待ち受ける、あるいは敵に向かって前進する、という、古代から近代まで続く伝統的な会戦の方法である。この場合、戦線は一次元の線になる。

次は、二次元の戦争である。これはゲリラ戦争を思い浮かべてもらうと分かりやすい。はつきりした戦線は形成されず、火器を持った個々の兵が戦闘地域に散開し、戦闘を行う。この場合、戦線は線ではなく、面になる。第二次大戦においては、この形の戦闘が多く見られた。

石原によれば、この変化は武器の進化によるものである。一次元の戦いは、槍や刀、火縄銃などで戦われるものであった。その後、銃火器の進歩によって、扱いやすい拳銃や機関銃が登場することで、状況は変わった。武器の殺傷力が高くなり、戦列を形成するよりも、個々の兵の判断で戦闘を始めたほうが、効率がよくなったのである。

こうして一次元から二次元に進化した戦争は、武器の進歩に伴って、さらに高次の領域へと進む。兵隊が空間を自由自在に動き回れる

ようになったときに、三次元の戦争が実現し、ここで戦争の進化は終わる。

この、戦争の進化の最終段階を、世界最終戦争と呼ぶ。その戦争によって、人類の戦争の歴史は終わる。そして新世界が到来し、真の平和が実現されるのである。

おそらく、ドローン技術によって実現されつつある次世代の戦争は、石原が予言した最終戦争の形態に近いだろう。戦争に参加するものが、生身の兵隊ではなく機械だという違いはあるが、ドローン戦争はまさに三次元の戦争である。

石原はさらに、この先に、時間を自由に移動できる四次元の戦争が実現されるかもしれない、ということまで考えていた。これに関しては、彼自身も確信はなかったようだが、彼の戦争論の論理的な帰結として、ありえないとは言えなかった。

3

日本は中国で殲滅戦をやろうとした。敵の戦闘能力を奪うために、その根拠地である農村を焼き払った。近代的な軍事学の観点からいえば、それは間違いないと言えないだろう。ヨーロッパの兵法は、敵を殲滅することを目的としている。あらゆる手段で敵を弱らせ、軍事力で押し潰せば勝ちであり、それを速やかに達成するための手段を考察することが、近代的な兵法である。日本軍は、それを忠実に実践したただけだと言える。

一方で、中国共産党のやり方は真逆だった。彼らは農民を傷つけないように気を配り、農作業の手伝いまでした。近代的な兵法のセオリーを無視した振る舞いである。しかし、長期的に見れば彼らのほうが正しかった。短期戦であれば殲滅戦という方法も有効かもしれない

が、長期戦の場合には、いかにして味方を増やすか、ということが最も重要になる。少しずつでも味方を増やしてゆくことができれば、長い時間の後には膨大な数の味方が生まれることになる。それが絶対的なアドバンテージとなるのである。

日中戦争における日本軍の敗北、それに続く国共内戦における共産党の勝利は、近代的な軍事学の誤りを浮き彫りにしたと言える。現在の中国指導部は、毛沢東以前の状況に逆戻りしているのではないか。孟子はかつて、仁者敵なしと言った。道徳を実践する者に敵は生まれず、味方ばかりが増えてゆく、という意味である。毛の戦略は孟子のそれであった。彼は、東洋の知恵が西洋の学問よりも優れていることを、身をもって示したのである。

たとえば独ソ戦では、ドイツとソ連はどちらも殲滅戦を実行した。このような場合、力の優っている方が勝つ。しかし、一方が殲滅戦を志向するのに対し、他方がそれとは反対の戦略をとるならば、必ず後者が勝つ。当時の中国共産党は、ナチスよりもソ連よりも遥かに巨大であった。

石原莞爾によれば、人類の戦争は短期戦と持久戦に分けられる。短期戦において有利な戦略は、必ずしも持久戦において適切ではない。第二次大戦は持久戦であった。それを短期戦と見誤り、殲滅戦略をとった日本軍は負けた。共産党は戦争の本質を理解していたため、正しい戦略を選ぶことができた。

では、次の戦争はどのようなものになるか。石原が予想していた世界最終戦争は、まぎれもなく短期決戦型の戦争である。それに臨んで、我々はいかなる戦略をとるべきか。

ここで、短期戦と持久戦を区別するものは何かといえば、それは火力の大きさである。一回の戦闘で敵軍を壊滅させられるだけの火力が

ある場合には、戦争は短期決戦の様相を呈する。技術が発達していないなどの理由で、それだけの火力が準備できない場合には、自ずと持久戦になる。世界最終戦争が短期決戦とされていたのは、一都市や一個師団を一瞬で破壊することができる兵器の存在が予想されていたからである。

石原によれば、短期決戦型の戦争と持久戦争とは、人類の歴史において交互に現れる。よって、第一次大戦が持久戦だったので、その次の戦争は決戦戦争になるはずであった。しかし、第二次大戦も持久戦となったので、それは最終戦争ではありえず、第一次大戦と連続したものだっただと考えることができる。

戦艦大和に見られる大艦巨砲主義は、明らかに短期決戦を志向するものであった。だがそれは、第二次大戦の実相からかけ離れていただけでなく、その次に来るべき最終戦争の形態から見ても不要なものであった。航空戦力と核兵器による殲滅戦争こそが、本来の最終戦争である。